

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 106 2017年2月18日発行



～チェルノブイリ 31 年・福島 6 年救援キャンペーン～

今中 哲二 講演会

放射能汚染の時代をどう生きるか、子どもたちをどう守るか



2017年4月28日(金) 19:00 開演 (18:30 開場)
練馬文化センター・小ホール (東京・練馬区)

“研究者に知識はあっても、
人々が抱えた苦しみは本当には分からない。
答えの出る問題ではないからこそ自分の言葉で話したい”
(2016年8月1日付 京都新聞「時のひと」より)

今中 哲二 いまなか てつじ◎京都大学原子炉実験所研究員。チェルノブイリと福島放射能汚染の実態について調査・研究を続け、原発の危険性を訴えている。

イベント開催のための賛同金を募集しています一口 1,000 円。
みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

チェルノブイリ支援で子ども基金がウクライナから勲章！

- p.2 4 月イベント情報
- p.3 2016 年支援報告と 2017 年支援計画
- p.4 チェルノブイリ支援で子ども基金が
ウクライナ政府から勲章を受章
- p.5-6 ウクライナからの報告
- p.7-9 家族訪問 (その 2)
- p.10 里親のページ
- p.11 2016 年 11 月の報告会
- p.12 ふくしまだより
- p.13 黒部ドクター
- p.14-15 チェルノブイリの歌声
- p.16 決算報告
- p.17 募金・救援状況
- p.18 事務局から



ベラルーシ・ゴメリの慈善団体「困難の中
の子どもたちへ希望を」(p.3 で報告)。
「クリスマスと 2017 年新年おめでとう！」



～ チェルノブイリ 31 年・福島 6 年救援キャンペーン ～

今 中 哲 二 講 演 会

「放射能汚染の時代をどう生きるか、子どもたちをどう守るか」



2017 年 4 月 28 日（金）19:00 開演（18:30 開場）**練馬文化センター 小ホール**（西武池袋線・西武有楽町線・都営地下鉄大江戸線 「練馬駅」北口より徒歩 1 分）

入場料 予約 1000 円 当日 1300 円 （全席自由） 定員 520 名

※予約受付は 4/26（水）午後 3 時まで。定員になり次第お申し込みを締め切ります。

〔主催〕チェルノブイリ子ども基金／未来の福島こども基金

今中さんのお母様は広島で被爆。被爆 2 世である今中さんは大学院生の頃までは「原子力は夢のエネルギー」と思っていたそうです。しかし安全と言われる原発をなぜ都会でなく田舎に造るのか疑問をもち始めました。1986 年 4 月 26 日チェルノブイリ原発事故が起きました。4 年後の 90 年から現地調査に入った今中さんは、周辺の人々が家を奪われ、村や町が消滅する様子を目の当たりにし愕然としました。そして今、「この問題を社会に広める責任があると感じ、研究を続けてきたが、福島を事故を防げなかったことが一番悔しい」「放射能汚染と被曝について、多くの人に確かな知識と情報を提供することが自分の役割」と考え、調査・研究を続けています。

チェルノブイリ原発事故から 31 年、福島原発事故から 6 年が経過。チェルノブイリ被災地では次世代の子どもにも健康被害は続いています。福島原発事故はいまだ収束していません。小児甲状腺がんの発症は増えています。この放射能汚染の時代をどう生きるのか、子どもたちをどう守っていくのか、一緒に考えてみませんか。

<講 演> 今中哲二

1950 年広島県生まれ。京都大学原子炉実験所研究員。大阪大学工学部卒、東京工業大学大学院修了。原子力工学専攻、工学修士。1976 年から 2016 年 3 月まで京都大学原子炉実験所助教。同実験所の小出裕章元助教らとともに原発の危険性を訴えてきた。チェルノブイリ原発事故後、現地に 20 回以上通い継続的に被曝の実態調査に取り組む。東電福島第一原発事故後、福島県飯舘村に入り、放射能汚染の実態調査を継続している。著書『低線量放射線被曝～チェルノブイリから福島へ』（岩波書店）、『サイレント ウォー見えない放射能とたたかう』（講談社）、『チェルノブイリ事故による放射能災害―国際共同研究報告書』編著（技術と人間）ほか多数。

<報 告>

黒部信一：「未来の福島こども基金」代表、小児科医／**佐々木真理**：「チェルノブイリ子ども基金」事務局長

***このイベントのチラシ配布やポスター掲示にご協力いただける方は下記連絡先へご一報下さい。**

<お申込み方法> 下記 Tel/Fax/E-mail いずれかの方法。Eメールの場合は、件名を「4/28 イベント申し込み」として次の項目をご記載ください。●お名前（ふりがな）●予約人数 ●Eメールアドレス ●電話番号 ●郵便番号・住所 ⇒ **お申込み・お問い合わせ：チェルノブイリ子ども基金**
Tel/Fax：03-6767-8808 E-mail：chernobyl1986@jcom.zaq.ne.jp

☆イベント開催のための賛同金を募集しています。一口 1,000 円
郵便振替口座 00160-4-98316 チェルノブイリ子ども基金

2016 年 12 月 報 告 と 2017 年 の 支 援 計 画

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。皆様の募金のおかげで 2016 年もチェルノブイリの子どもたちへの支援活動を行うことができました(決算報告は 16 頁をご覧ください)。2017 年は以下のような活動を行います。引き続きご支援いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

★2016 年 12 月の支援報告

＜ベラルーシ・慈善
団体「困難の中の子どもたちへ希望を」
クリスマス会＞

会員の病気の子ども
たち(4～17 歳:190
人)のために毎年開



催されているクリスマス・新年会の費用の一部として 500 ドルの支援を行いました。子どもたちは果物、お菓子、ぬいぐるみなどのプレゼントを受け取り、歌や踊り、ゲームなどをして楽しみました。生活の厳しい家族には、缶詰や調味料などの食品も手渡されました。病気の子どもとその親たちが一同に会する、大切なひと時でした。



~~~~~  
子ども基金が支援したものは、現地団体・病院が物品等を購入後、領収書を提出してもらいます。子ども基金は、書類上のチェックと、事務局スタッフが現地を訪問した際に確認を行っています。

## ★2017 年の支援計画

＜ベラルーシ＞

●児童健康回復センター「希望」: ①「腫瘍病の子どものための保養」②「甲状腺がんの手術を受けた親とその子どものための保養」②は 2008～2014 年まで実施していましたが、子ども基金の資金不足により中断していました。2016 年の国の法律の変更(1 グループの保養人数の変更)により①の人数が少なくなり、また昨年支援した「太陽光パネル建設」(建設費支援に応じ、子ども基金の保養プロジェクト費用数人分に割り当てられるという「希望」との契約。詳細は 2016 年 2 月号)により、①の実施額が減るため、②の保養を再開します。

●慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」: この団体の里子の支援。「希望」で実施する病気の子どもための保養費用、会員の子どもたちの医薬品代、スタッフ給料と事務所維持費の一部。

●すでに解散した慈善団体「チェルノブイリのサイン」に所属していた里子支援、元スタッフ(里子支援に関する連絡等)1 名分の給料。

＜ウクライナ＞

●慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」: この団体の里子の支援。スタッフ給料と事務所維持費の一部。

●「汚染地域に住む病気の子どものための保養」: ウクライナ国内の子どもサナトリウムで実施。



## チェルノブイリ支援でウクライナ政府から“公妃オリガ勲章”



ウクライナの発展や文化振興に寄与した女性に与えられる公妃オリガ勲章を、チェルノブイリ子ども基金事務局長 佐々木真理が受章しました。ウクライナのチェルノブイリ被災

児童の救援に尽力したことが評価されての受章です。1月26日、東京のウクライナ大使館にて、イーホル・ハルチェンコ大使から勲章が授与されました。子ども基金から向井雪子（代表理事）、小寺隆幸（理事）、黒部信一（顧問）、清水玲子（監査役）が授章式に参列しました（NHK 国際放送と共同通信の取材がありました）。

「このような勲章をいただきありがとうございます。チェルノブイリ事故により被害を受けたウクライナの子どもたちへの救援活動を、私たち子ども基金が長年続けてきたことを評価していただき、大変嬉しく、光栄に思います。私自身は1998年から基金の活動に関わってきました。甲状腺の手術を受けたウクライナとベラルーシの子どもたちに、現地のサナトリウムで日本文化の教室を開くボランティアに参加したのがきっかけでした。その後は毎年現地を訪れ、これまでに多くの子どもたち、その家族に出会いました。初めの頃に出会った子どもたちは、今は大人になり、結婚して、子どもをもつ親になっている人も多くいます。そのような姿を見るのは大変嬉しいことです。しかし、支援の途中で亡くなってしまった子どもや、大人になり出産後に亡くなってしまった女性もいます。現在、私たちが支援しているの

は、チェルノブイリ事故を直接知らない二世代目の子どもたちです。事故から間もなく31年ですが、今でもその影響が続いているということを、この受章を機に、多くの日本人たちに知ってもらいたいと思います。私たち子ども基金は、これからも救援活動を続けていきます」「子ども基金を設立、救援活動を始めた広河隆一さん、それを引き

継いできた子ども基金の関係者、そしてこれまで基金の活動を支えてくださった多くの方を代表していただいた勲章だと思っています」佐々木真理（授章式での挨拶、インタビューに答えて）



「子ども基金のさまざまな救援活動は、日本の多くの市民による募金により実現できました。その中で佐々木が

毎年現地の家族と子どもたちを訪ね、その思いに寄り添うとともに、それを日本の里親に伝えることでウクライナと日本の市民の間で人と人との繋がりを作り出してきたというきめ細かい取り組みが評価されたのではないのでしょうか。ウクライナ政府が事故後30年の時点で、チェルノブイリ救援25年間の取り組みを、改めて評価したことは、事故の被害は終わっていないという国際社会へのメッセージでもあるように思います。日本とウクライナとの25年間にわたる草の根の市民の交流が評価されたということ、日本の市民に、とりわけチェルノブイリのことを気にかけ、また福島の子どものことを考えている多くの方々にお伝えしたいと思います」チェルノブイリ子ども基金理事・スタッフ一同

2016年4月26日、世界はチェルノブイリの悲劇から30周年を迎えました。この地球の何億、何千万という人々にとって、この事故はすでに歴史の一コマとなっています。一方、ウクライナの何十万という人々にとって、チェルノブイリとは日常の現実であり、この原子力災害の被害は今もって克服されてはいないのです。

1986年、私はチェルノブイリ原発の衛星都市として作られたプリピャチ市に暮らしていました。勤め先は原発の機材を組み立てるために特別に作られた企業でした。チェルノブイリ原発4号炉で爆発が起き、従業員たちの家族がプリピャチの町から避難した後、私たちの会社はこの爆発事故の処理作業に積極的に加わりました。私自身も、崩壊した4号炉ブロックでの直接的な作業に、当直として何回かあたりました。その後、1週間の休暇を得て、チェルニゴフ州の親類のもとへ向かいました。そこでは丁度、地元の学校に通う生徒たちの甲状腺の検診を医師団が行っていました。そこで私の甲状腺も検査してもらえることになりました。ところが、医師たちも驚いたことに、私の甲状腺の被曝を示す値は、チェルニゴフの学校の生徒たちのそれよりも低かったのです。当時私は、すでに毎時20レントゲンに達するような放射線レベルに確かに曝されていたのに対して、その生徒たちは原発から100キロ離れた比較的被害の少ない地区にずっといたにもかかわらず…。その時私は、子どもたちは放射能の影響をもろに受けやすい、ということを確認しました。1986年の事故後、特に子どもたちは、軽々とチェルノブイリの「平和目的の」原子力のターゲットとなってしまいました。第1は、チェルノブイリ原発の従業員や建設作業員の子どもたちです。彼らは4号炉の崩壊後最初の何時間かのうちに、子どもの許容量をはるかに

超えるような放射線量を浴びました。第2は、近隣地域の村々の小さな子どもたちです。彼らが原発30キロ圏から避難できたのは、事故からようやく1週後のことでした。第3は、いわゆる第2、第3汚染区域と呼ばれる場所（原発から50～300km）に住んでいた子どもたちです。KGB<ソ連国家保安委員会>の大人たちは、そこに住む子どもたちがどれ程恐ろしい放射線量に曝されているのか、情報を隠してしまったのです。特に、キエフ州ポレスコエ（ポリシケ）地区やジトミル州ナロジチ地区の子どもたちが避難できたのは、実に1990年になってからのことでした。合わせると、当時100万人近くのウクライナの子どもたちがチェルノブイリの事故の被害を被ったことになります。

ではチェルノブイリの最前線の現場は、今どうなっているのでしょうか？ ウクライナの現政権は、崩壊した4号炉を覆う新たな安全シェルターを完成させることをチェルノブイリに関する優先政策としています<2016年11月完成>。そして原子力ロビーは、2017年にこのシェルター施設が実際に使われるようになれば、チェルノブイリの事故の被害は最終的にすべて克服されることになるかのような見方を一貫して社会に植え付けようとしています。しかしたとえチェルノブイリ原発を覆う最新式のシェルターであろうと、ウクライナの広大なポーシェ地方からプルトニウムやストロンチウム、セシウムといった放射性核種を取り除いて元通りの綺麗な土地にするなど無理なことは、まったく明らかなです。さらにこのシェルター施設では、ウクライナ社会政策省に登録されている40万人にのぼる子どものチェルノブイリ被災者たちに関わる様々な喫緊の問題を解決することも出来ません。

ところで、現在その小さな被災者たち、チェル

ノブイリの子どもたちとは誰のことを指すのでしょうか？なぜ、それほどまでに人数が多いのでしょうか？第1に、そこにはチェルノブイリの事故処理作業に参加した作業員たちの子どもが含まれますが、その数は比較的多くはありません。より大きなグループに属するのは、30km 圏から避難した人が親となって生まれてきた子どもたちです。その数は数万人に及びます。そして最大のグループに属するのが、すでに挙げた第2、第3ゾーン汚染地区に住む子どもたちであり、その地域にはキエフ州、ジトーミル州、リウネ【ロヴノ】州の何百という居住地が含まれます（ナロジチ、オヴルチ、イヴァンコフ、ロキトノエ、ザレチノエ、コロステン、ルギヌイ、ドゥブロヴィツァなど）。健診の結果、事故当時子どもで、その地に暮らし続けた両親から生まれた、第2、第3ゾーンの子どもたちの中で、事実上健康であると診断された子どもは10%以下です。キエフ州のポレスコエやイヴァンコフ地区に暮らす子どもたちについて言えば、その割合はおおよそ3%、ジトーミル州ナロジチ地区の子どもに至っては、健康と判断される子どもが全くいません。中でも消化器系や神経系、循環器の慢性疾患が多数を占め、ウクライナのポレーシエ地方では、古くからヨウ素や鉄、その他身体にとって重要な微量元素類の欠乏が見られていますが、さらに悪化を招いています。放射能汚染地域に住む子どもたちの63%に、身体的発達の不相応性が目立ち、さらに4人に1人の子どもは、そうした不相応性ととも実年齢に対する生物学的年齢の遅滞を伴っています。これらの子どもたちの免疫には、非特異的防御機能の失調や抑圧状態が見られ、それらが慢性的な肉体疾患を生じさせることにつながっているのです。これに関しては、母親の甲状腺に対する被曝線量と両親の総被曝線量、そしてその子どもの免疫不全症状の度合いに相関関係のあ

ることが明らかにされています。

現在、第2、第3ゾーンに住む子どもたちに被曝をもたらしている主な要因は、牛乳や肉、ベリー類、キノコ類、ハチミツ、さらに穀物といった地元産の食材を食べることによって起こる内部被曝です。この何年かの間、放射能汚染地域における農業分野の復興対策は、財政難から行われておらず、地域の数多くの居住地において、牛乳に基準値を超えるレベルの放射性物質が含まれている例が見つかっています。リウネ州ロキトノエ【ロキトネ】地区の村々においては、基準値を5〜7倍超えるようなケースさえ明らかになっているほどです。

慈善基金「チェルノブイリの子どもたちの生存」のスタッフたちの見方によれば、キエフ州やジトーミル州、リウネ州の放射能汚染地の子どもたちをウクライナ国内の汚染されていない自然環境の中で毎年集団保養させることは、そうした子どもたちの状態を改善させるのに役立つものです。しかし現在では、ウクライナ国家政策によってサナトリウムや保養所、あるいはキャンプで保養を受けるためのクーポンを支給されるのは、チェルノブイリの事故による明白な後遺症を負った子どもたちに限られており、その割合はチェルノブイリ被災者といえる子ども全体の2〜3%にすぎません。こうした中、ナロジチやオヴルチの児童・生徒たちの保養を、日本のチェルノブイリ子ども基金が支援をしてくれています。時には他の外国の人道組織が支援をしてくれることもあります。それはかなり稀になっています。チェルノブイリの子どもたちは、原発事故から30年が過ぎてもなお、国際社会からの支援を必要としています。【2017年1月6日寄稿：ウラジーミル・ザクレフスキー。1958年生まれ。子ども基金が支援している「チェルノブイリの子どもたちの生存」代表者の夫、元チェルノブイリ原発関連会社社員、事故後ジャーナリストとなった。】（翻訳：平野進一郎）

前号(2016年10月号)に続き、昨年8月に訪問した里子を紹介します。

~~~~~  
T・ボグダン 2011 年生まれ
ゴメリ市

右腹膜腔の神経芽細胞腫。
骨盤器官の障害、下肢不完全
麻痺。2012 年発病。これまで
に2度の手術、10ブロックの
化学療法を受けた。現在も定
期検査、治療を続けている。

前回(2014年5月)訪問時
は、壁にもたれかかって座ること、這うこ
としかできなかったが、今回、部屋の中の短
い距離を自分の足で歩けるようになっていた。
両親が子どもの治療に熱心で、インターネットな
どで効果のある方法を自分で調べ、自宅でも
歩行訓練をしている。父親は昼休みに家に戻
り(職場が近い)、昼食もそこそこに息子を公
園に連れて行き、リハビリの相手をしている。
仕事から戻ってからも毎晩1時間くらい歩く
訓練をしている。初めはよく転んでいたボグ
ダンは、だんだん効果が出始め、2015年3月
頃から自分の足で立って歩けるようになった
という。「普通このような子どもは歩くことは
難しい、と医師はとても驚いている。でもま
だ一人ではどこにも行かせられず、常に私た
ちのどちらかが付添わなければなりません」
と母親。父親は「もっとしっかり歩くには、
足が真っ直ぐに伸びないといけない。その訓
練のためポーランドから特別な靴を取り寄せて
います。ベラルーシ製のものはあまり効果がな
いのです」と話した。ボグダンはまた、血糖値
が高く、血液病の専門医にもかかっている。ミ



ンスクの病院で、膀胱の治療をしたときには、
家賃が1日20ドルの部屋を借りて10日間そ

こから通院した。

今住んでいるのは、
父親の職場の寮。台所
と一部屋だけの大変古
い建物。アパートに引
越す順番を待っている。

「学校に通えるよう
になるかはまだわから
ないが、その頃まで
には新しいアパートに引

越したい」と母親は話した。ボグダンは
外に遊びに行くのをいつも楽しみにしている。
そしていつか海に行くのが夢だという。

ボグダンの変化も大きかったが、母親の表情
が以前とは見違えるほど明るくなっていた。
父親は息子の治療、教育に大変熱心。「病気の
子どもでもしつけは厳しくしないとイケない」
と話した。また、ボグダンが所属している
慈善団体の活動にも大変協力的。病気の子
どもをもつ他の家族の相談にも乗っている。

D・リーザ 2007 年生まれ ゴメリ市

左卵巣の腫瘍。2014年に手術。腫瘍ととも
に卵巣を摘出。化学療法を受けた。現在も定
期検査を続けている。

母親マルガリータの話「娘は自分の病気のこ
とを知ったとき、「私は将来赤ちゃんを産め
る?」と泣いて聞いた。2年生の時、手術を受
け入院していたため、学校を長く休み勉強が
遅れてしまった。今は3か月に一度、ミンス
クの病院に卵巣の定期検査を受けに行く。免
疫力が低く風邪をひきやすい。鼻や喉が弱い。

皮膚もとても弱く、蚊に刺されただけで酷く腫れたり瘡が残ることもある。アレルギー、喘息もある。半年に一度血液検査も受けている。ヘモグロビン値がいつも低い。

リーザが手術を受けた後、障害児認定のことも、何も知らなかった。数か月後、ゴメリの慈善団体から連絡をもらい、障害児認定の申請手続きを教えてもらい、団体の会員になって支援を受けられるようになった。障害児のいろいろな権利のことなどもこの団体から教えてもらい助けられた。

リーザの姉ユーリヤ（1986年11月生まれ）は子どもの頃から甲状腺の問題がある。首のリンパ節の腫れ

と甲状腺肥大と診断されている。定期検査を受け、薬を飲んでいる。幸いまだ手術にはいたっていない。医師は「普通ベラルーシ人はみんなそうだから、心配ない」と言った。

自宅はゴメリ市内の、交通量の多い通りに面した古い一軒家。リーザと両親、祖父母、ユーリヤの家族（夫と子ども）が暮らしている。庭で野菜や果物を栽培している。家のすぐ前が大きな市場があり、車の騒音や排気ガスの問題もあるという。祖父母の代から（60年代から）住んでいる家で、昔はこんなに車は多くなかったそうだ。祖母は腕を骨折して包帯を巻いていた。祖母は脳出血や糖尿病、祖父は心臓の病気があり、二人とも病気がちで障害者だという。マルガリータは「近年のゴメリの酷い暑さ（以前はこんなに暑くなかった）、紫

外線、放射能、排気ガス、そんなものがみんな合わさって、みんな健康を害しているのかもしれない」と話した。

8月に子ども基金がベラルーシの「ナデジダ（希望）」で開催した保養プロジェクトに、リーザは初めて参加した。「以前、別のサナトリウムに行ったときは寂しがり、夜に泣いて電話してきた。

ナデジダでは、こちらから電話しても『今忙しい、クラブ活動も、ディスコもあるし』と家を全く恋しがらなかった」とマルガリータが言うと、「ナデジダが大好きになった。良い友達ができたし、部屋をきれいにして褒められたりもした。来年もまた行きたい」とリーザは言った。

マルガリータは町の獣医学センターで食材の放射能値を測定する仕事をしている。森のきのこやベリー類など今でも高い数値がでることがあるという。「道端などで売っているきのこなどを買ったり、測定していないものを食べたりするのは愚かなこと」と話す。私たちの訪問時、父親が釣ってきた魚を持って帰ってきたところだった。この魚も母親の職場で測定するそうだ。

A・イリヤ 2001年生まれ ゴメリ市

非ホジキンリンパ腫（悪性腫瘍）。2003年発病。母子家庭。母親、双子の兄弟キリールと3人暮らし。最初、イリヤが高熱を出したため病院に行くと、アデノイドと診断され摘出した。その後、州立病院で検査をすると、頭に5～6個の腫れものがあることがわかった。化学療



法は2005年まで3クール受けた。その後2年間は検査のため通院していた。次に耳に異常が出て薬を飲んでた。その後、食べ物アレルギーが起きるようになった。食事に気を付けていたら1年後には治まった。現在、検査は半年に一度。最近の検査結果はよくなかった。心臓の問題、耳炎、慢性扁桃腺炎がある。免疫力が低く、よく風邪をひく。抗菌剤、抗炎症剤、抗真菌剤を服用している。病気でよく学校を休むため、勉強が遅れてしまいがちだ。

今のアパートには5年前から住んでいる。イリヤの病気に対する補助として、購入費の50%は国が負担した。部屋の内装は全部自分たちで行っている(*1)。ウクライナ国境近くの村に住んでいるイリヤの祖母は高齢だが健康で、今も畑仕事をしている。彼ら3人は夏をそこで過ごす。イリヤの障害児年金、母親ニーナの年金(*2)、祖母の畑の野菜・乳製品等のおかげで生活している。食べ物をすべて買っていたらとても生活できない。「日本の里親の支援をいただけるようになりどんなに助かっているか…」とニーナは涙ぐんだ。「薬代、二人の息子の文具なども必要。以前イリヤは、血液病の子どもの団体の会員だった。その時は衣類等をもらっただけだった。今はワレンチーナ・ウ

ラディーミロヴナさん（イリヤが所属している団体の代表者）のおかげで、保養や日本の支援が受けられるようになった。今回イリヤは初めてナデジダに行き（8月に行われた子ども基金の保養プロジェクトに参加）、とても明るくなって帰ってきた。先生や仲間たちのおかげか、恥ずかしがり屋だったのが少し治った」

キリールは小さいときヘモグロビン値が低く病気がちだった。ニーナは一人でそれぞれの子どもを病院に連れて行ったりした。キリールには心臓疾患と慢性扁桃炎もある。二人とも側弯症で、体育の授業は他の子どもたちとは別の特別なクラスで受けている。ニーナは白血球減少症、関節症と診断されている。息子たちのためにも自分のためにも、食事には気を付けているという。実の父親は、子どもたちが小さい頃、他の女性を見つけて出て行った。これまで子どものことを心配して連絡してきたこともないし、援助したこともないという。子どもたちは父親を覚えていないようだ。

イリヤは生物や文学に、キリールは地理や情報学に興味がある。また兄弟は日本語に大変興味をもっている。「この言葉は漢字でどう書くの」など聞いてきた。

*1 引っ越して直ぐに生活できる日本のアパートとは違い、壁紙や窓、扉、水回りなどの内装は住人自身で行なわなければならない。訪問時に通された客間以外に子ども部屋が2部屋あったが、ベッドと古い勉強机があるだけで、がらんとしていた。

*2 ニーナは52歳。病気の子どものもつ親には年金が通常より早く支給される。しかしそのためには、子どもの手術後の状態、何年間患者として登録されていたかなどの条件が必要となる。年金はこれまで一般的に、男性60歳・女性55歳から支給されていたが、2017年1月1日から段階的に引き上げられ、2022年には男性63歳・女性58歳からとなる。



イリヤ、母ニーナ、キリール



里親のページ

里親の伊藤展子さん（愛知県）はこれまで何度も地域でチェルノブイリ写真展、絵画展を開催しています。昨年10月、11月には、ノルティ瀬戸（瀬戸市）で写真展、古鳴海公会堂（名古屋市）では絵画展とお話の会を開催しました。

~~~~~

### “チェルノブイリ 30 年福島 5 年の今年”

福島原発事故の写真とチェルノブイリ原発事故の写真展を開催した会場に、30 代位のお父さんと 5 歳位のお子さんが手をつないで見に来てくれました。福島原発の写真の前では、お父さんはお子さんにキャプション以上の説明を熱心にしていました。しかし次のチェルノブイリ原発事故の写真の前では言葉もなく「遠い外国のお話だね」と…。30 年とは人間の世界ではそう言うことなのだと思います。チェルノブイリ原発事故は、多分お父さんの小さい頃か生まれる前の遠い外国の出来事なのでしょう。しかし放射性物質ストロンチウム 90 が半分になるのに 28.8 年かかり、セシウム 137 は 30 年、ラジウム 226 は 1600 年、プルトニウム 239 は 2.4 万年、そしてウラン 238 の半減期は 45 億年と人間の世界の感覚とはまったくかけ離れている年数です。放射能は無くす手立てが分からない、人体への影響がいつまで続くか分からない、未だに人間がコントロールできない物質。福島原発事故から 5 年たった今、日本の放射能汚染による被害をできるだけ小さくしたい、できる事ならなかったことにしたいと感じてしまうのは私だけではないはずです。今もチェルノブイリ事故の影響は終わっていません。原発事故後の影響から福島の子もたちを守らなくては。私達は、「原爆症で苦しむのは自分達で最後にして欲しい」と切に語られた広島、長崎の被爆者の方々の願いを叶え

ることはできなかった。又チェルノブイリの子も達の絶望や生きたいという思い、勉強したい、遊びたい、運動したいという夢や希望にどれだけ答えられたのだろう。もう福島の子も達を犠牲にすることは許されない。ベラルーシの保養施設を手本とした沖縄での保養や、世界に名前も知られていない町や村で行われている小さな活動こそが大切、大きな力になると考えています。（伊藤展子）

### ＜伝治山自主保育での話しの感想＞

◆チェルノブイリは遠い国の事だと思っていたけど、今の福島の何十年後をチェルノブイリと重ねて考える事が出来た。伊藤さんの様な人達が世の中を少しずつかもしれないけど動かししているのだと思った。◆大変勉強になり色々考えさせられた。放射線は見えないし匂いも味もないが何百年何千年単位で影響が出続けるもので、特に子ども達に影響が出やすいというのがすごく怖いと思った。未来ある子ども達のために何が出来るか考えるよいきっかけになった。◆原発の話が聞けて良かった。日々いろいろな事が起き風化していく。子ども達の未来が心配になった。◆利己的かもしれないが絶対に自分の子どもにはそんな経験をさせたくない。◆身近なところにこんな活動をしている人がおるんだなあと考えさせられた。◆すごい悲惨な経験をしたからあんな絵が書けるのだと思った。絵を見る事で恐怖も覚えたが、見せてもらえて良かった。



## 報 告 会 「 2016 年 夏 子どもたちの保養～チェルノブイリと福島」

2016 年 11 月 12 日（土）パルシステム東京新宿本部・会議室にて「チェルノブイリ子ども基金」「未来の福島こども基金」「生活協同組合パルシステム東京」共催により、子どもたちの保養についての報告会を開催しました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございます。前年に続き、報告会の開催・宣伝にパルシステムさんに多大なご協力をいただきました。また報告会の様子や参加者の感想は同HPでも紹介されています。

### <参加者の感想>

●改めて保養の大切さを痛感した。国も縮小ではなく継続して健診、支援をしてもらいたい。(40代・女性) ●「球美の里」に保養にくる福島の子どもの健康状態が年々悪くなっていることは、予想されていたことだが、現実となるとショック。これから保養が非常に重要になる。「福島は安全だ」という宣伝と闘う必要もある。(60代・男性) ●私自身も病を抱えているが、子どもたちはどんな状況においても生きる希望を失わないように、何か支えとなることができればと強く思った。子どもたちを守るためにやれることはすべてやらなければ、という佐々木さんの言葉に感動した。(40代・女性) ●福島の子どもの現状を聞くことができてよかった。がんなどの放射性物質による影響だけではなく、発達障害など精神的な影響による問題も増えているのだと思った。(汚染地域) 福島の人が放射性物質の影響を受けないためには移住するのが一番良いと思うが、金銭面などの理由で汚染地域に住み続ける必要がある場合、精神的に不安定にならないようにすることと、放射性物質を意識して除去するようにすることのバランスが難しいと思った。(20代・女性) ●チェ

ルノブイリ、福島の保養の詳しい報告、よく理解できた。福島の様子も黒部先生から正しい見方を教えていただいた。もっと国が動いてほしい。全体を通して政治の大切さを感じました。(90代・女性) ●福島で被ばくした人たちはチェルノブイリを追いかけけているという。話を聞けば聞くほど後手になっていると感じた。医療サポートなどを見ても心配。福島がデータを取るために利用されているようにも感じる。(60代・女性) ●保養の様子が、たくさん写真と報告からよくわかり、保養の必要性、重要性を再認識した。福島に住むしかない子どもたちの今後が非常に心配。今後も関心を持ち続け、勉強をしていきたい。(60代・女性) ●原発、子どもたちの健康、環境の安全を含めて関心を持つていくことが大切だと思った。東京都はじめ首都圏（東京電力）の電気を自分たちで“作る”ことを考えない限り、地方に電気を供給させていて何も語ることはできないのではないかと。(50代・女性) ●佐々木さんが最後に話した「一生懸命に生きようとする子ども、それを全力で支える保護者、その家族たちをこれからも支援したい」という言葉はとても心に響いた。地域、国を越えてつながる大切さも感じた。(30代・女性)

~~~~~

2016 年 8 月、ベラルーシの保養施設「希望」で実施した「腫瘍病・血液病の子どもたちのための保養」の費用の一部は、パルシステム東京『平和カンパ』が、また、「沖縄・球美の里」の保養には、パルシステム東京『福島支援カンパ』が使われました。

ふくしま便り

「ひだんれん」について

2014年11月、「原発事故被害者集会」が福島市で開かれました。それまでは原発事故被害者がそれぞれに集団損害賠償裁判や、集団ADR（裁判以外の紛争解決手続き）の申し立てを行っていましたが、この時初めて各団体が一堂に会し、横のつながりを持つことになりました。

このつながりを継続して被害者の力を結集しようと準備を重ね、翌2015年5月に「原発事故被害者団体連絡会（略称ひだんれん）」が発足しました。東京電力や国に対し、被害者への謝罪、被害の完全賠償、暮らしと生業の回復、被害者の詳細な健康診断と医療保障、被ばく低減策の実施を求め、また、事故の責任追及をしていくことを活動の目標として、現在21団体が加入しています。意図的に分断させられた福島で、それぞれの違いを認めて手をつなぎ協力しあうことは、強大な権力に立ち向かっていくうえで特に大切なことです。

ひだんれんが発足して間もなく、2015年6月、安倍内閣は「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」の指定を2017年3月までに解除し、東京電力の精神的損害賠償も2018年3月に打ち切るとの「福島復興加速化指針・改訂版」を発表し、その直後に内堀雅雄福島県知事は、避難指示区域外からの避難者（以下自主避難者と書きます）に対する住宅の無償提供を2017年3月で打ち切ることを選択しました。

住宅無償提供の打ち切りは、賠償金もなく、ただでさえ苦しい自主避難者の生活が根底から脅かされ、帰還の強要により避難を継続する権利が奪われます。追いつめられた避難者の中には、体調や精神状態の不調を訴える人が少なくありません。ひだんれんは、これを喫緊の課題として、福島県に住宅無償提供の継続を求めて、毎月のように要請行動を行い、2016年3月には政府交渉を、6月からは毎月県との団体交渉や、

県議会への働きかけも行ってきました。住宅提供打ち切りは、県外の自主避難者ばかりではなく、避難指示が既に解除になった区域の仮設や借り上げ住宅に住んでいる人たちも、今では自主避難者となっているため、その対象となります。

県行政は、度重なる私たちの要請に対して「除染により放射線量は低下し、避難する状況にない」と帰還政策を変更しようとせず、打ち切り決定を下した内堀県知事は、一度も被害当事者団体との交渉の場に出てこようとはしません。3月まで残された時間は少ないですが、粘り強く被害者の権利を守るための交渉を続けていきます。

福島には問題が山積していますが、復興優先で原発事故被害者の問題は後回しになっています。しかし、健康被害はこれからもっと増えていくでしょう。今後、県内外の被害者共通の課題として健康手帳の要求や、県内在住者のための保養の制度化などに取り組もうという意見が出ています。国に実施させるにはかなり難易度の高い問題ですが、これから、関連団体や関係機関と協力し模索しながら進んでいきたいと思っています。今後の動きにご注目下さい。

ひだんれん事務局
大河原さき



写真は昨年12月4日、福島市内での「自主避難者の住宅提供継続を求める」デモ



「福島のことを考える」

私がチェルノブイリ子ども基金に関わったのは、丁度福島原発事故後 5～6 年たつ今と同じ頃の 1992～93 年頃だったと思います（チェルノブイリ事故は 1986 年 4 月）。当時、小児科医として子どもの白血病の治療を担当していましたが、その原因の一つに母親の受けた骨盤計測のための X 線撮影 2 枚がありました。それがきっかけで医療被曝を減らす運動を消費者リポート誌で提唱。その後日本消費者連盟と日教組養護教員部と小児科医師連合の人たちなどで運動し、私は、原子核物理学者 J・W・ゴフマン（*1）や科学技術史家の中川保雄（*2）らの反 ICRP（国際放射線防護委員会）派からの知識で理論構築をしました。（当時、かつて青医連〈青年医師連合〉や全共闘〈全学共闘会議〉だった放射線医たちは皆 ICRP に取り込まれていて、反 ICRP 派の臨床医は全国で 10 人以下でした。）私が前面に立ち戦い、小中学校の胸部 X 線検診を廃止させました。その時に向井雪子事務局長（当時）に誘われて子ども基金に関わりました。その時私が問題にしたのは、たった 2 枚の X 線撮影が後年にがんの原因になるからやめようというものでした。2 月 2 日現在、福島市、郡山市でたった 1 時間過ごした時の外部被曝線量は、その 200～700 倍になります。そこに住んでいる方はどのくらいの線量をあびているのでしょうか。屋内、屋外でも違いますが、ですから福島市、郡山市、双葉郡全域は、チェルノブイリでは強制的避難区域にあたります。それは、日本政府は福島原発事故後、一時・緊急避難的な措置として一日の放射線許容量を 1mSv（ミリシーベルト）／年から 20mSv／年に引き上げましたが、それを恒久的なものとして固定してしまったことに原因があります。ベラルーシの食品基準値は、一生食べ続けることを前提に設定されています。

福島県も国の政治方針で安全だと言い、唯一原発事故の被害と国際的に認定されている甲状腺がんだけの検診を勧めていましたが、それも沢山発生して来たので、原発のせいではないと言いきれなくなり、検診の縮小を始めました。その他のがんや、いろいろな放射線の被害は隠されました。なぜなら、がんや病気の診断だけではその原因は

判らないからです。それは疫学調査などで社会的、政治的に決められるものです。それで私は、アメリカの医学史家ヘンリー・E・シグリストや環境医学者のルネ・デュボス（*3）、元東大医学部長白木博次（*4）らの「医学は自然科学ではなく、社会科学である」との考えを支持しています。日本の公害被害の歴史がそれを語っています。

チェルノブイリの経験から、今後いろいろな病気が子どもたちや大人に出てくると思います。放射線の害はがんだけだと言うのは間違いで、セシウムは筋肉や血管、ストロンチウムは呼吸器や骨にたまりやすく、甲状腺にも沈着します。機能的な病気は数字や画像に表れませんが、がんは画像で確定診断できることから、「発がん性」が放射線による影響の代表とされているのです。今、仮設住宅などへ避難している高齢者の死亡原因の約半分は肺がんで、残り半分は心筋梗塞と言われています。ただそれも、診療や病理解剖を受けていないために、はっきりとはしていません。

大人の白血病や悪性リンパ腫も増えているようで、福島県立医大の血液内科には患者があふれ、入院も治療も待たされています。東京などに避難してきた子どもは、ほとんど避難した先の土地の子どもの発病率と変わりませんが、福島に残っている子どもには、病気が増え、感染症やアレルギー疾患や発達障害が増えているようです。チェルノブイリの事故では得ることができなかった検診データを積み重ね、現実には起きている病気を明らかにしていくことが必要です。検診と診療を行い、がんなどの大きな病気が見つかった場合には福島県立医大以外の専門機関へ紹介していく。さらには、子どもの発達精神相談など、すべての病気を念頭に置いた「たちねクリニック」を、いわき市の南端にある「いわき放射能市民測定室たちね」内に作る予定です。

*1: 元リバモア放射線研究所副所長でアメリカ原子力委員会から研究費をもらい、原子力の安全性の研究をして危険であるとの結論を出した結果、職を追われた。「人間と放射線」の著者。*2: 神戸大教授。著書「放射線被曝の歴史」。*3: ロックフェラー大学環境医学教授。*4: 神経病理学者で水俣病、ワクチン禍などの証言をした。

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師

ブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

チェルノブイリの歌声 ～みなさまからのメッセージ～



<カレンダーご購入者から>◆私には子どもがいないので、何か役に立てれば…と思い、毎年買わせていただいております。事故当時私は20代でした。ロシア語が好きで勉強しています。これから毎年買わせていただきます。（東京都・Nさん）◆今年も楽しみにしていたカレンダーを昨晚じっくりと見て、読みました。2012年表紙のインナが可愛らしいお嬢さんを残し他界してしまったことに強い衝撃を受けました。今年のカレンダーは6月のインナを除き、すべて2016年7月に撮影。それ故に非常に感慨深いものがありました。より身近な問題として捉えることができます。広河さんの写真は何を写しても美しく強いメッセージが伝わってきて素晴らしいと思います。この頃では、家庭を持った娘もカレンダーを購入するようになりました。（神奈川県・Eさん）◆2010年生まれの娘が、最近このカレンダーに写っている子供や親たちがどういう人々なのかについて理解し始めてくれています。原発の話って子どもに簡単に説明するのはなかなか難しくて。まず電気とはなんぞやの説明が大変です。娘はまさにフクシマ世代なので、少しずつでもしっかりと理解をしてもらって、大局的な社会の構造転換にいたる視点を獲得してもらいたいと思っています。（東京都・Iさん）◆僅かながらですが、それが核で被害にあった子供達の支援になれば私にとっても幸いです。（京都府・Nさん）◆1年間ナターシャの笑顔、日本の子ども達の元気な様子と共に暮らしました。来年も一緒に生きていけることを願います。もう1部は孫に送ります。原発の被害がなくなりますように。（静岡県・Fさん）◆ほんの気持ちを送らせていただきます。私は施設のお世話になっておりますが、皆さんを通じて原発事故にいつも関心を持っていきたいと思っております。（秋田県・Sさん）◆放射能の被害は常に絶えることなく私たちの身近にあります。それなのに私たちはその危険を忘れがちです。悔しいです。少しでも思い出すために、せめてカレンダー

を自分のそばに置くことにしました。いのちと放射能は共生できないことをすべての人が実感できる日まで。その日が来るのを信じて、天寿を生きていきます。（東京都・Nさん）◆カレンダーの中の親子の表情は比較的明るくてほっとしますが、写真の下を読むと厳しい状況が続いていることが分かります。これは同時に福島未来であり、今日も、「福島の女性が震災から3か月以内に妊娠して生まれた子供のうち、極低出生体重の乳児の割合が震災以前の2〜3倍」というニュースを見て、やはり放射能の影響の深刻さを思い知らされました。関心を持ち続けることが大事ですね。（東京都・Uさん）◆チェルノカレンダーについて思うことは二つあります。一つはこれまでの写真のこと。上階から下に集まった大勢の子どもたちを撮った、ある年の写真。まぶしそうにカメラの方を見上げているその笑顔一つひとつがよく撮れていて、鮮明。皆さんなんていい顔なんだろう。もう一枚は遠来の客(?)を迎えるために民族衣装で盛装した若い男女が、お菓子/ケーキのようなものをもって待ち構えている場面。両方の写真に登場する若者の表情が無垢で素朴かつ美しく、私はしばし見とれました。こんな素敵なお顔をした若者がいっぱいになれば、21世紀の地球には希望もてるかなあと私は希望を持ちました。国境とか資源を取り合っている戦争はいいかげんに終えて、平和な世界になってほしいです。もう一つはカレンダーの使い方です。すっかり馴染んだこのカレンダー。小さな写真とその説明も大事で有意義です。差し上げたり、買ってもらう人には、トイレのような狭いところに掲げてもらって、説明にも必ず目を通すようお願いしています。放射線汚染、被ばくの、子々孫々にまで及ぶ恐ろしさについての認識を共にする人を多くしていきたいです。（愛知県・Kさん）◆この夏はチェルノブイリ30周年のドキュメンタリーを観る機会があり、たまったカレンダーを改めて見ました。思いを馳せ続けたいと思っています。（大阪

府・Sさん) ◆毎年カレンダーを作って下さり、ありがとうございます。いろいろご苦労はされていると思いますが、皆さんの笑顔がとてもすてきです。(東京都・Yさん) ◆福島原発事故についても風化が言われる一方で、子どもたちの受けた辛い仕打ちの報道もあり胸が痛みます。種々の形で痛手を受けた方々の苦難にはそれこそひとりひとりの状況があり、息長く応援の気持ちを持ち続けていきたいと思っています。カレンダーは、苦難の中でも命と暮らしが繋がっていくことの重みと希望とを呼び起こしてくれます。(東京都・Mさん)

~~~~~  
◆刊行物届きました。いつも思うのですが愛読されている方々の気持ちが詰まっていますね。(東京都・Mさん) ◆1月12日寄付をさせていただきました。母の想いです。私たちが子どもの頃から、世界で起きている出来事を教えてくれました。決しておしつけることなく、大切なことを伝えてくれた母に感謝しております。微力ながら、応援しております。(東京都・匿名の方)

~~~~~  
＜公妃オリガ勲章受賞に対して＞★オリガ勲章の受章おめでとうございます。佐々木さん、また日頃ご活動されている皆さまがウクライナと日本の架け橋となっているということだと思います。最近は活動に参加できずにいますが、今回のお知らせを聞き、続けていくことの重要性を改めて感じました。辛い過去に目を背けず、少しでも明るい未来を作るために、自分にできることを考えていきます。(埼玉県・Tさん) ★身内の者が貰ったような嬉しい気持ちです。佐々木さんの現地の(一方ならぬ「苦労」も含め)ご活躍が評価されたものと思います。子どもたちも喜んでいてと思います。(神奈川県・Hさん) ★長年のウクライナの子もたちへの援助活動と、それが子どもの未来の形成に役立っていることをウクライナ政府が評価したものと思います。小さな組織でも続けられれば大きな事が出来るのですね、これからも活動を続けてください。(東京都・Kさん) ★これまでの功績を認められ、勲章という素晴らしい評価

を受けたことで、本当に大勢の人のためになる大きなことをされてこられたのだと改めて感じます。今まで関わってこられた皆さま、そして今まさに核となって活動されている佐々木さんに心よりお祝いと尊敬の気持ちをお伝えします。(東京都・Yさん) ★長い間の地道な活動が評価されたことをとても嬉しく思います。私の里子も成長しました。本当に多くの子もたちがどれだけ救われたことか。私もできること続けていきます。(神奈川県・Eさん)

★みなさまからのご支援により、腎臓移植手術を受けたウクライナの青年、P・ウラディスラフさんから手紙が届きました。



＜里親の方へ＞

両親とともに新年を自宅で迎えました。歩くのはまだ少し辛い感じです。今はまだ、たくさん薬を毎日飲んでます。肝臓や胃の治療もしなければなりません。少しずつ、ずっと、治療していくことになります。薬の副作用がいろいろ出ていますが、でも、大丈夫です、命は続いています、僕は生きています。これからどうなっていくのか、想像が付きませんが、よくなっていくと信じています。他のみんなと同じように、というわけにはいきませんが、でも僕は生きたいのです。

＜子ども基金と募金者の方へ＞

子ども基金のおかげで、僕は里親の方やほかの支援者の方からのご支援をいただくことができました。僕を助けてくださりほんとうにありがとうございます。経済的援助だけでなく、あたたかい励ましの言葉も本当にうれしいです。もしみなさんがいなかったら、僕はもうだいぶ前にこの世にいなかったか、または苦しみ続けていたでしょう。今は「生きていかなければ」と思っています。そして、ここまで生きてこられた日々感謝しながら、生きています。火曜日にはキエフの病院に行きます。僕と両親から皆様に深くお礼を申し上げます。

2017年1月27日 P・ウラディスラフ

2016年度決算報告書
【2016年1月1日～12月31日】

収 入		支 出	
項 目	金 額	項 目	金 額
前期繰越	12,884,029	救援	
募金		医薬品・物品	1,315,325
救援一般	9,779,532	保養費*2	0
保養費	978,310	特別保養費	3,028,980
特別保養費	2,216,200	団体運営費*3	3,378,400
里子支援	5,714,280	里子支援*4	4,720,629
		緊急支援*5	35,406
		奨学生支援*6	37,828
ウクライナの青年の治療支援	3,863,480	ウクライナの青年の治療支援	5,711,967
		派遣費	245,787
		送金・為替手数料	73,500
		未来の福島こども基金	921,486
救援キャンペーン		救援キャンペーン	
2016年4月イベント	1,679,110	2016年4月イベント	482,262
2017年4月イベント	2,000	2017年4月イベント	70,200
11月保養報告会	22,800	11月保養報告会	3,455
購読料・運営費*1	1,404,070	事務運営費	
預貯金利息	2,933	国際 Tel・Fax	0
		国内 Tel・Fax	101,698
		印刷・コピー費	117,924
		ニュースほか発送費	620,991
		人件費	2,965,680
		交通費	391,551
		事務消耗品費	229,637
		事務所費	310,501
		広告・宣伝費	37,281
		資料・会議費	11,414
		国内振込手数料	2,464
物販売上		物販仕入	
本・ポストカード・CD・民芸品	83,710	本・ポストカード・CD・民芸品	7,984
カレンダー2016	1,097,508	カレンダー2016	9,050
カレンダー2017	2,114,600	カレンダー2017	1,090,987
小 計	41,842,562	小 計	25,922,387
		次期繰越金	15,920,175
合 計	41,842,562	合 計	41,842,562

*1 (株)カタログハウスからの運営費100万円含みます。

*2 ベラルーシ「希望」で行われている”汚染地区の学校単位の保養費の一部”を『保養費』として支援してきましたが、「希望」側から、自立経営が見込まれるため援助は終了してもらってよいと申し出がありました。これまで『保養費』をご指定でいただいたご寄付は、その下の段の『特別保養費』として使わせていただきました。

*3 太陽光発電プロジェクト支援、現地団体のスタッフ給与、事務所費など。

*4 里子支援 68人(経費1割、2017年1～6月支援分も含みます)

*5 緊急支援 1人

*6 奨学生支援 1人

* 切手、はがき、図書カード等14,320円分も寄贈されています。

* カレンダーの収入・支出とも次年度にまたがります。2016年度のカレンダー収益は2,209,186円でした。

2016年度の会計監査の結果、適正であることを認めます。

2017年2月9日

会計監査

監事

鈴木 由利子

監事

清水 玲子



募金・救援状況



●募金状況 2016年10月～2017年1月 (単位:円)

	10月	11月	12月	1月
募金件数	201件	169件	200件	97件
救援寄付金	698,562	2,664,002	1,699,758	1,307,053
保養費	193,900	122,910	203,600	38,500
特別保養費	0	70,000	70,000	35,000
里子支援	81,300	12,140	599,370	1,650,260
ウクライナの青年の治療費	15,500	10,500	17,700	0
ニュース購読料	42,000	52,000	44,000	14,000
合 計	1,031,262	2,931,552	2,634,428	3,044,813

*ほかに図書カード・切手 5,486 円分のご寄付をいただきました。

●救援状況 2016年10月～2017年1月 (単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

里子支援 9 人 (2017 年 1～6 月分の支援金)	354,060
緊急支援 1 人 (2017 年 1～6 月分の支援金)	35,406
運営費 (通信費、家賃、スタッフ給料、現地銀行手数料)	322,194

<ベラルーシ>

◎困難の中の子どもたちへ希望を

里子支援 54 人 (2017 年 1～6 月分の支援金)	1,765,933
医薬品 (1 年分)	1,263,120
運営費 (通信費、家賃)	292,501



♥募金団体名一覧♥ (順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【10月】ケイ歯科クリニック／(株)桜井書店／民宿 夢民村 【11月】葦の会有志／放射能から子ども達を守る沼田の会／ラブアンドピース／山のハム工房ゴーバル／伊藤法律事務所／はり灸みのわ／ひばりが丘グレイズ教会／埼玉東部法律事務所／(有)真岡厚生クリニックワーク／恵泉女学園中学・高等学校 文化祭委員会 【12月】うえだ平和映画祭／日本キリスト教団 広島船越教会／所沢 9 条の会やまぐち／(株)鹿王企画／美杉むらのわ市場／大阪北教会 婦人会／中振キリストの教会／千葉友の会／(株)七つ森書館／フオークダンスを楽しむ会／友愛富士見町保育園／ストッププルトリウム神奈川連絡会／(有)ラバンノワールくろうさぎ／弓町本郷教会 女性の会／福島の子どもたちを守る会・北海道／恵泉女学園中学・高等学校 宗教部／川和保育園／プーシェル・アキウ 【1月】松山古町教会 C.S／イエス・キリスト教会 祈りの家／ACT21／三重チェルノブイリ被曝児童救援募金／西小岩幼稚園／チェルノブイリ子ども基金奥羽／日本基督教団 田名部教会／川和保育園 父母の会／自治労日野市職員組合

＊ ＊ ご協力いただいているみなさまへ ＊ ＊

振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で

ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際はお申し出ください。

★振込用紙の項目変更についてのお知らせ★

これまではベラルーシ「希望」での年間保養(汚染地区の学校単位の保養)費用について『保養費』と記載し、子ども基金がベラルーシとウクライナで実施している「病気の子どもの保養プロジェクト」を『特別保養費』と記載していました。「希望」側から、自立経営が見込まれるため年間保養費の援助は終了してまわってよい、と申し出がありました(16 頁の*2 もご参照ください)。そこで今後、「病気の子どもの保養プロジェクト」を『保養費』と記載します。その他は『救援寄付金』、『ニュース購読料』、使途のご指定のない場合はチェックなしでかまいません。『ウクライナの青年の治療費』の項目は終了します。ご支援いただいたみなさま、ありがとうございました。15 頁に本人の手紙を掲載していますのでご覧ください。

<変更前の項目>

- ☐ 救援寄付金
- ☐ 保養費
- ☐ 特別保養費
- ☐ ニュース購読料
- ☐ ウクライナの青年の治療費

<変更後の項目>

- ☐ 救援寄付金
- ☐ 保養費
- ☐ ニュース購読料

事務局から

■2017年救援カレンダー ご購入
いただいたみなさま、どうもありがとうございます。1部1100円のところ、
2月より800円に値下げして販売し
ています(送料別、6部まで200
円)。お買い忘れの方、どうぞこの機会にお申し込みくだ
さい(ご購入者の感想は14頁に掲載しています)。



■公妃オリガ勲章受章について

NHK国際放送のニュース番組(NHK WORLD NEWSLINE)
で1/26に紹介されました。授章式の様子、これまでの
基金の活動について、事務局内の風景や里親の方のイ
ンタビューなど紹介されています。2/26まで以下より映
像が見られます。

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/videos/20170126194429680/>

また、2/3の東京新聞「この人」欄でも紹介され
ました。

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいた
だける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加くだ
さい。次回 6/17(土)午後1時~4時頃まで。ご都合の
よい時間帯だけでも大歓迎です。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビ
ル セントラルプラザ10階) ※日程が変更になる場合
もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日まで
にメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10
時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

■「基金ニュースレター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレタ
ーをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000円
/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、
募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは
子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご
不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願い
いたします。)

★支援金の振り込み方法についてのお知らせ★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。
同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口
座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい
方法をご利用ください。

※振込用紙以外でのお振込の場合は、お名前、金額、
ご寄付の内容をご連絡いただけますと大変助かりま
す。お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願い
いたします。

(1)郵便局の口座をお持ちの方:子ども基金の郵便
口座へ直接お振り込み

郵便振替口座 00160-4-98316

口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)他金融機関の口座から、子ども基金のゆうちょ
銀行口座へのお振り込み

店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316

受取人名 チェルノブイリゴドモキキン

(3)銀行名:三菱東京UFJ銀行

支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367

口座名:チェルノブイリ子ども基金

★編集後記★ 今号の「うたごえ」(14~15頁)には
みなさまから寄せられた声を多く掲載しました。直接会っ
てお話しできる方は限られていますので、このように多く
のメッセージをいただき大変うれしいです。ほんとうにあり
がとうございます。事務局では4月救援イベントに向けて
宣伝を始めています。ご友人、知人、周りの方々に広め
ていただけましたら幸いです。宣伝チラシが必要な方は
ご連絡ください。お送りします。みなさまのご協力をどうぞ
よろしくお願いいたします。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●
〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。